失礼さという観点から見た二人称指示の体系

金　井　勇　人

1．はじめに

日本語において、対話の相手である二人称を表す方法には、いくつかのタイプがある。その基本形として、本稿では以下の５つを提出する。

Ⅰ．人称名詞[1]（あなた・きみ・おまえ…）によるもの
Ⅱ．指示語（そちら…）によるもの
Ⅲ．固有名詞[2]（山田さん・花子ちゃん・太郎くん…）によるもの
Ⅳ．普通名詞（お父さん・課長・先生…）によるもの
Ⅴ．非明示（ϕ）

本稿では、第一に、このように複層的な二人称指示の諸タイプを、その指示方法の違いに即して分類する。第二に、それぞれの性質（特に二人称に対する失礼さについて）が、どのように異なるのか、それはどのような理由によるのか、について考察する[3]。

2.1．人称名詞

人称名詞の特徴は、それらがあらかじめ「内容」を持たない、ということである。例えば、人称名詞「あなた」の、指示対象は誰であるかという意味での「内容」は、会話の場において初めて与えられる。

(1)　それはあきらかに影村の訊問であった。加藤を或る種の容疑のもとに取調べようとしている刑事の態度にも見えた。加藤は自分の顔のほてっていくのを感じていた。いかりが顔に出て来たのである。
「いったい、**あなた**はなぜ私にそんなことを訊ねるんです」
「あなただと？」
　影村はむっとしたような顔でいった。先生といわずにあなたといったことが影村には不愉快に思えたにちがいない。　『孤高の人』

「影村」は教師、「加藤」は生徒である。「加藤」が「影村」に発した人称名詞「あなた」は、この場で発されたことによって初めて、「影村」という内容を獲得できる。

注目すべきは、「影村」が、「あなた」と指示されたことを不愉快に思った、ということである。このように、人称名詞による二人称指示は、二人称への失礼さを伴うことがある。

それは、人称名詞の「内容」が会話の場において初めて与えられる、という性質と、大いに関係がある。このメカニズムは、直示[4]である。そして、直示における＜直接指し示す＞という性質が、失礼さの原因だと考えられるのである。[5]

特に(1)のような、下位者から上位者への直示で、かつ両者が親しい関係にない場合には、その失礼さはより顕在化するだろう。では逆のパターンの、上位者から下位者に対する直示で、かつ両者が親しい関係にある場合は、どうか。

(2)「おっかさん、ノリおくれよ。」
「なんに使うの。」
「おれも、それ、手つだうよ。」
「吾一ちゃん、きのうも言ったでしょう。**おまえ**はこんなことをするもんじゃありませんよ。」
「だって、おっかさん、今、いねむりしてたぜ。」　『路傍の石』

ここでは、上位者「おっかさん」が、下位者＝息子「吾一」を、人称名詞「おまえ」によって指示する。しかし「吾一」が、それに不愉快さを感じた様子は見られない。「おっかさん」による直示を、「吾一」は許容している、と解釈するべきだろう。それは、この直示が、上位者から下位者に対するものであること、そして両者が親しい関係にあること、による。

人称名詞による指示は、基本的に失礼である。ただし、上のような環境においては、その失礼さが許容される（ときには“親愛の情”を表す）と考えられる。

2.2. 指示語

指示語が、二人称指示に転用されることがある。その場合、方向を指す「そちら」（あるいは変異形「そっち」など）が使われる。「そちら」も、実際の場面で発されるまで「内容」を持たない。つまり、指示語による指示も、直示によるものである。

(3)…突然、向うから、かっぽう着姿で小走りにやってくる山中良子に会った。
「あら、どうしたの？」
「**そちら**こそどうなさったんですか」
「私ね、今、勤めてるのよ」　『太郎物語』

「そちら」が使用できるのは、指示主体と指示対象との物理的・心理的な位置が、彼我（コ対ソ）の関係にある場合である。このような使用環境においてのみ、指示主体から見て「そちら」の方向にいる人物を、「そちら」で指示することができる。（適切でない状況における使用は、疎外感を与えかねない）

では、「そちら」による指示の過程は、どうなっているだろうか。「そちら」は、可能性として、「そちら」という方向に存在する＜全てのもの＞を指示することができる。しかし実際には、それら様々な可能性のうちから、当該の二人称のみが、指示対象として選択される。

このような関係は、＜全体－部分＞というものに他ならない。つまり、＜二人称を包含する「そちら」→二人称＞という、＜全体→部分＞という転換[6]が、指示語「そちら」による二人称指示を、成立させるのだと考えられるのである。[7]

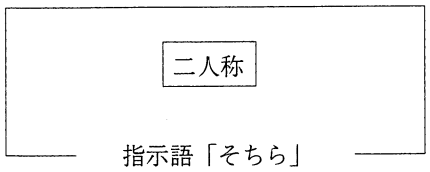
ところで、(3)の「そちら」を「あなた」に変更すると、失礼な感じを帯びる。

(3)’　あなたこそどうなさったんですか

指示語「そちら」も、人称名詞「あなた」も、同様に直示を利用する。しかし「そちら」の場合、その指示の過程に、上に見たような間接化が介在するため、（見かけ上）選択の余地が残される。それゆえ、失礼さを回避できる。これは言わば＜間接的な直示＞である。

一方、「あなた」の指示範囲と、二人称とは、最初から一致する。したがって、そこには間接化が介在しないため、（見かけ上）選択の余地がない。そのことが、人称名詞による指示をより失礼なものとするのだろう。これは言わば＜直接的な直示＞である。

(4)



2.3. 固有名詞

個々人の持つ名称が、固有名詞である。固有名詞による二人称指示は、直示ではない。例えば固有名詞「太郎くん」は、会話の現場によらず、それが誰を指すのかが、あらかじめ決まっている。このように固有名詞は、あらかじめ「内容」を持つ。こうした指示の方法を、直示に対して、記述と呼ぶことにする（田窪1997: 16-17参照）。

(5)　「山本さん、長官として言えることじゃないかも知れませんが、**山本さん**は講和については、一体どう考えておられるんです？」　『山本五十六』

(5)では、固有名詞「山本さん」による二人称指示が行われている。しかし、固有名詞による指示は、あるときには許容されにくい（失礼となる）。例えば(1)を、次のように変更してみる。

(1)'　「いったい、**影村さん**はなぜ私にそんなことを訊ねるんです」

生徒が教師を、その名前で指示することは、やはり難しい。ここから、固有名詞による指示は潜在的に失礼さを有する、という原則を引き出せるだろう。そのことは(6)からも見てとれる。

(6)　婚約者となっても志方は吟子を先生と呼んでいた。実際それ以外に適切な呼び方はなかった。
…（中略）…
「私のような者と一緒になることに、先生は後悔していませんか」　『花埋み』

女医の「吟子」は、「志方」より十三歳年上である。そして「志方」は、婚約者であるのに、「吟子」を、例えば「吟子さん」というように固有名詞で言うことができない。固有名詞の失礼さを、「志方」は回避しているのだと解釈できる。

固有名詞が失礼となるのは、特に、上位者あるいは親しくない人物に対する場合で、かつ、相手の属性が普通名詞（次節）によって表せる場合だろう。そうしたときには、普通名詞を選択した方が失礼ではなく、固有名詞を選択すると失礼となりかねない。

もちろん、役職に関係なく「～さん」と呼び合おうという会社など、例外はあろう。また、普通名詞が選択肢として存在しなければ、固有名詞が許容されやすくなる。ここでは、固有名詞による二人称指示は、潜在的に失礼さを有する、と言うにとどめる。

2.4. 普通名詞

ある社会集団における身分や立場などを表す名詞が、二人称指示に転用されることがある。この場合、固有名詞ほど強く限定はされない。しかし例えば、ある家庭における「お父さん」の「内容」は、あらかじめ決まっている。したがって、この種の普通名詞による指示も、記述によるものである。（以下、「先生」のような意味的に尊敬のニュアンスを持つ語ではなく、単なる役職名である「課長」を考察対象として取り上げる）

(7)　「私が出張中だったのがまずかったのです。**課長**は去年山林課においでになったばかりなの

で、ナメられたんですよ。いま資材課の伝票で見ましたが、市価の三倍で買わされていらっしゃいますね。むかしからあいつの図々しさは有名なものなんですよ」　『パニック』

(7)では、役職名を表す普通名詞「課長」によって、二人称が指示されている。これが例えば、人称名詞「あなた」だと、失礼な感じを否めない。それは＜直接的な直示＞だからである。

(7)'　**あなた**　は　去年山林課においでになったばかりなので、ナメられたんですよ。

また固有名詞の場合も、先に述べたように、特に下位者から上位者の場合には、失礼となり得る。(以下、「課長」の名前を仮に「山田」とする)

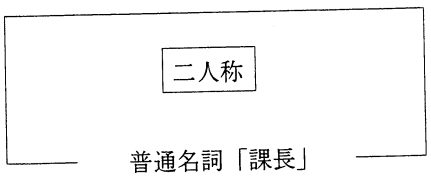
(7)"　**山田さん**　は　去年山林課においでになったばかりなので、ナメられたんですよ。

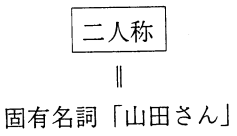
(7)'と(7)"とを比べると、直示ではない分、(7)"の方がより失礼ではないだろう。しかしともあれ、(7)の普通名詞「課長」による指示が、最も失礼でなく、最も適切であるように感じられる。では、普通名詞による指示は、なぜ失礼ではないのか。それは、指示語「そちら」の場合と同じく、そこに間接化が介在するからだと考えられる。

普通名詞「課長」は、可能性として、「課長」という役職にあるすべての人を指示できる。しかし実際には、それら様々な可能性のうちから、眼前にいる（かつ課長職にある）二人称のみが、指示対象として選択される。つまり普通名詞「課長」は、課長のうちの一人である二人称を包含するのであり、したがって両者の関係は、＜全体－部分＞という関係に等しい。
このように、普通名詞による指示もまた、＜全体→部分＞という転換[8]を通して行われる。これは言わば、＜間接的な記述＞であり、このことが、普通名詞による指示が失礼ではない理由だと考えられる。[9]

一方、固有名詞「山田さん」も記述によるのではあるが、その指示範囲は最初から、二人称「山田」と一致する。つまり固有名詞による指示は、言わば＜直接的な記述＞であって、そのことが、固有名詞の（潜在的な）失礼さの原因だと考えられるのである。[10]

(8)





2.5. 非明示

二人称を表すための言葉をそもそも明示しない、というストラテジーもある。それを非明示と言うことにする。非明示の場合、身振り手振りや視線などの現場的な手がかり、または文脈的な手がかりによって、暗黙裡に指示が行われる。

(9)「おいおい、与太をとばすのはやめろ！　そんなことができるものか」
「できたら（φ）どうしますか？」
「逆立ちしてこのへんを歩いてみせる」
「では、ほんのしばらくおまちを……」　　『ブンとフン』（φ）の挿入は筆者による

（φ）には、人称名詞・指示語・固有名詞・普通名詞（＋は）などが、理屈上は入り得る。(「できたら（あなたは）どうしますか？」など)。しかし(9)では、何も言わない。それは、「どうしますか？」の「主語」が誰であるかが、様々な手がかり（同一の会話が続いていること、二者の対話であること、これが質問文であること、など）から明白だからである。

日本語では、「主語（主格)」を明示しないことが、構文的に許容される。むしろ、それが分かりきったものならば、普通は明示しない。分かりきった「主語」をあえて明示するのは、何らかの意図を伝えたいときか、あるいは単に“くどい”表現である。

そのような特性を、しばしば私たちは、失礼さ回避に利用する。つまり、主語に当たる二人称を意識的に明示しないことによって、失礼となるかもしれない言葉を、そもそも避けるのである。これは、最も確実な（指示にまつわる）失礼さ回避の方法と言えるだろう。

3.1. 二人称指示の諸タイプを分類する諸基準

ここまで、5つのタイプの二人称指示を見てきた。これらは、以下の3つの基準によって、分類することができるだろう。

Ⅰ. 明示／非明示

非明示の場合、失礼な言語的指示を行う恐れがない。一方、明示の場合、どのような言葉がより失礼か、どのような言葉がより失礼ではないか、という問題となる。

Ⅱ. 直示／記述

明示において。直示の場合、＜直接指し示す＞という性質により、失礼さは強い。一方、記述の場合、そのような性質を伴わないため、失礼さは弱い。

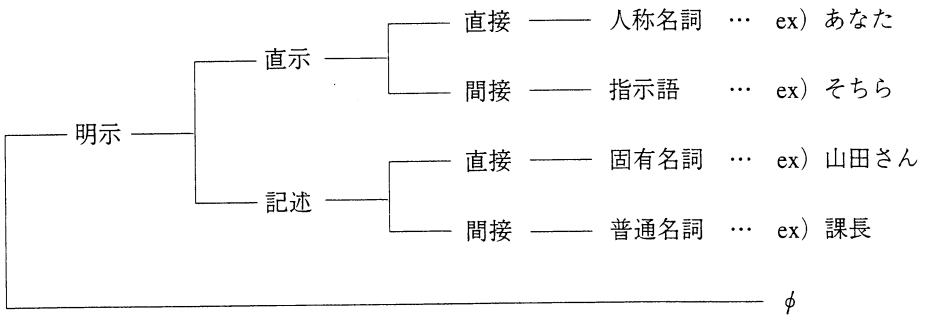
Ⅲ. 直接／間接

直示・記述それぞれにおいて。直接の場合、選択の余地がないために、失礼さは強い。間接

の場合、（見かけ上）選択の余地が含まれるので、失礼さは弱い。

3.2. 失礼さという観点から見た二人称指示の体系

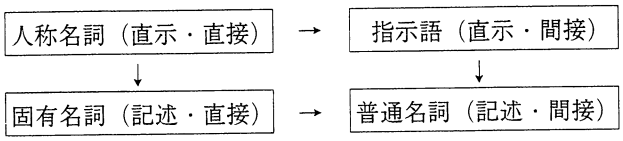
以上の基準をもとに、二人称指示の体系を表にまとめると、次のようになる。



3.3. 二人称指示におけるストラテジー

明示において、二人称への失礼さを強める要素は、直示・直接である。逆に、失礼さを弱める要素は記述・間接である。これらを踏まえると、次のような結論が引き出せるだろう。

★　二人称に対する失礼さを回避するためのストラテジー：



＊人称名詞（あなた）が失礼であれば、指示語（そちら）あるいは固有名詞（山田さん）への変更が行われる。どちらが選択されるかは、その環境による。この段階においてもなお失礼であれば、普通名詞（課長）への更なる変更が行われる。

ex）あなた　→　そちら・山田さん　→　課長　は　何をお飲みになりますか。

一方、★のような操作をあえて（まったく、あるいは最後まで）行わなければ、失礼さを前面に出すことによって、それとは表裏の関係にある“親しさ”を表すことができ得る。もっとも、その意図が伝わらなければ、ただ単に失礼さが増すだけである。反対に、失礼さ回避も、単なる慇懃無礼になってしまう可能性がある。このように、会話の環境や、当事者同士の関係性などによって、同じ言語表出が、ときに悪意として受け止められてしまうこともあり得る。

4．おわりに

Ⅰ．日本語における二人称指示には、人称名詞／指示語／固有名詞／普通名詞／非明示のそれぞれによる５つのタイプがある。

Ⅱ．それらは、明示か非明示か／直示か記述か／直接か間接か、というそれぞれの基準によって、分類することができる。

Ⅲ．二人称に対する失礼さを回避する場合には、原則的に、記述化・間接化というストラテジーが、採用される。

脚注

（1） 日本語の「私」「あなた」等の類は、例えば他の言葉で代用できるという点からも、開かれた語類であり、これらを他の名詞類と区別する文法的理由はない（田窪1997：14参照）。本稿ではこの主張に従い、「あなた」の類を、人称代名詞ではなく、人称名詞と呼ぶ。

（2）「さん」などの接尾辞（ゼロも含む）までを、１つの固有名詞と捉える。

（3） 本稿では、文内における二人称指示を考察対象とし、「呼びかけ」は対象外とする。また、本稿で対象とする失礼さは、指示方法にまつわるものであり、文体的・意味的な理由によるものは、対象外とする。

（4） 直示…「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むこと（金水1999：68）」

（5） ＜直接指し示す＞という性質が、指示対象に対して失礼であるのは、人に＜指差し＞を行うのが失礼であるのと、根源的な意味において同様の現象である、と筆者は考える。

（6） この転換は、メトニミー（「（現実）世界のなかで隣接関係にあるモノとモノとの間で、一方から一方へ指示がずれる現象（瀬戸1997:105）」）と解釈できる。

（7） 同じく指示語でも、「そこ」は許容されない。それは、場所を指す「そこ」は、指示範囲が局所的であって、二人称を包含する関係にないからだろう。

（8） この転換は、シネクドキ（「より大きなカテゴリーとより小さなカテゴリーとの間の包摂関係に基づく意味的伸縮現象（瀬戸1997:166）」）と捉えることができる。しかしこれは同時に、メトニミーと捉えることもできる（小泉1997:195参照）。

（9）「あだ名」も、性質的には普通名詞に近い。それは、「あだ名」の生成過程においては比喩の利用が欠かせないからであり、その意味でこれらは＜間接的な記述＞だからである。（cf. メトニミー：赤頭巾ちゃん／メタファー：白雪姫／ etc.）

(10) 「山田課長」における前半の「山田」は、固有名詞としての完結した働きをするわけではなく、専ら弁別性を担う標識に過ぎない。「山田課長」は標識の付加した普通名詞である。ただし弁別の必要がないときに用いると、やや押し付けがましく感じられるだろう。

参考文献

織田　稔　1994『直示と記述同定～英語固有名の研究～』風間書房

金水　敏　1999「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』vol.6-4,67-91 言語処理学会

小泉　保　1997『ジョークとレトリックの語用論』大修館書店

鈴木孝夫　1973『ことばと文化』岩波書店

瀬戸賢一　1997「意味のレトリック」『文化と発想とレトリック』94-177　研究社
田窪行則　1997「日本語の人称表現」『視点と言語行動』13-44　くろしお出版
多門靖容　2002「比喩分析の新展開～換喩・提喩を中心に～」第39回 表現学会（桜花学園大学 2002. 6. 1）シンポジウム資料
中村　明　1991『日本語レトリックの体系』岩波書店
三上　章　1972『現代語法序説』くろしお出版（初出1953）
Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics* Cambridge University Press

引用資料

阿川　弘之『山本五十六』　曽野　綾子『太郎物語』　渡辺　淳一『花埋み』
井上ひさし『ブンとフン』　新田　次郎『孤高の人』
開高　健『パニック』　山本　有三『路傍の石』　以上、新潮文庫より。